

ただ迷うことと準備を調べて自分と向き合うこと¹⁾

——西田哲学の対話と心理療法——

西川昌弘* 森川知美**

【要 約】

本研究は、1) 仏教の参禅求道を日常とした西田幾多郎の哲学と彼の対話の理論の心理療法への適用を試みた。筆者たちは自験例、すなわち、筆者の一人のスーパービジョンの下で、別の一人だったセラピスト訓練生（女性、20代前半）が実施した心理療法過程をデータに用いた。そのとき、筆者らは、座禅の技術を使った心理療法を、ダブルバインドを多用する母親の脱同一視を課題にもつ30代前半の女性クライアントに実施した。この心理療法の第三期開始期の4セッションの逐語データを、西田幾多郎の理論の構成概念を用いて分析した。結果は、本概念が、心理療法の展開を測る道標の機能を果たすことを示した。さらに、2) 心理療法理論を使って本事例の心理療法展開上の変数を検討した。結果は、セラピスト訓練生が、訓練グループに於いてグループを健康な母体として体験したことが、彼女が一時的に陥った閉塞と麻痺状態を克服する契機になったことが見出された。

キーワード：女性の発達課題、母親脱同一視、西田哲学の対話モデル、移行空間、霊性

昔の人は言っている、いつもニコニコしているには、感情をしずめ、思考力を正しく働かせることが共に必要である²⁾。前者しかない人を愚といい、後者のみの人を狂という。

—天台智顗, 松居桃楼訳³⁾, 1966, p. 34-35—

西洋人と比べて日本人の心には、内面性が多分に見られる。日本人の心に弱点と見られるものの目につくのは、分別性をあまりに軽んずるからである。内面に偏すると短所は、感情的に無分別なところに歴然として出てくる。

—鈴木大拙, 1970, p. 306-307—

1. 問題意識

筆者は、西洋社会・文化に由来する心理療法の日本人への適用を検討してきた（西川、

1) ただ迷っている状態と日常生活規則の枠に入って自己探求している状態は違う（山川宗玄, 2019）

2) 5つの準備として、1. いつもニコニコ 2. 着物と食べ物への感謝の心 3. なるべく感情を波立たせない生活の場 4. 今までのものの考え方を白紙にかえそう 5. 純粋な人間関係だけを（天台智顗, 松居桃楼訳 1966, p. 41）

3) 劇作家、昭和10年代に東京精神分析研究所所員で国際精神分析協会編集委員（櫻庭太一, 2021）

* 本学非常勤講師

** 本学修士課程

2019 他)。精神分析的発達論では、成人期女性の心理療法の展開期の主題は、自我の働きとして母親からの脱同一視と父親への同一視の体験、そして供養心（くようしん）に支えられる超自我を基盤とする主体性のあり方である（Daehnert, C., 1998; Moore & Fine, 1990）。これは結果として筆者は同意するが、方法的に身体性の重視が言われるべきである（Howell, E., 2005）。以上を整理すると、男性であれば、心身一致の実行を基盤とする、鈴木大拙のいう「超個の個」（1960 p. 95-97）の道を歩み始めることと言えるだろう。このような課題を持つクライアントと向き合おうとするとき、心理療法理論は、主に自我の働きに焦点を当てる臨床理論に加えて、霊性（鈴木大拙, 1968）に根ざして生きた人の哲学を基点とする、私たちの学が必要だろう。日本人の成人期心理療法理論を明らかにするためには、日本の霊性を生きた西田幾多郎の哲学（以下、西田哲学と記す）の臨床理論への適用が要請される所以である。

2. 目標

研究の目標は、1) 西田幾多郎の哲学（以下、西田哲学と記す）の「対話」⁴⁾モデルの構成が、心理療法過程の展開点を抽出する際の有効な変数であることを検証すること。2) 成人期女性との心理療法の重要変数を同定することだった。

3. 方法

心理臨床概念と、西田幾多郎の哲学の主要概念の、純粹経験、自覚、絶対無の場所における対話概念を概観する。次に、心理療法の基本技術を整理し、それに則って実施された心理療法のデータを示し、分析する。

3-1. 認識の方法

本節では、心理臨床概念の重力の中心、甘え概念、宗教、哲学の、鈴木大拙の霊性概念、西田幾多郎の、直感と反省、純粹経験、自覚、絶対無の場所における対話の諸概念を示す。

心理療法の発達概念

重力の中心；英国の小児科医で精神分析家のウィニコットは、乳児が養育者に抱かれて「重力の中心」に在る自分を感じることを強調した。養育者の「背骨が立った」姿勢である。そして、生後数週間後から記憶力を獲得し始めてからも養育に手を抜かず、心身一致した心を育むことを強調した。（Winnicott, D.W., 1958, pp. 99-100）

甘え；「甘え」現象（Doi, T., 1971）は、日本人固有なもので、結晶化以前の無定形という特徴が有り、主に感情の非言語的な相互作用を指す。（Scheidlinger, S., 1999, p. 91）筆者の西川は、甘えの語で浮かぶことがある。かつて上田閑照先生から言ってもらったことがある

4) 本稿では西田哲学の対話理論を「対話」と記す。

のだが、「西川君，美人が前から歩いてきたとしよう。いいなあ，と君は思うだろ。僕でもそう思う。で，そう思っているうちにその女性とすれ違うよね。そしたら，もうみんなお終いなんだよ」である。

日本の靈性/禅宗/浄土宗/浄土真宗

靈性の歴史：平安時代を経て鎌倉時代にはいつて。大地に根ざした日本人はこの時始めて宗教に目覚め自らの靈性に気づいた。(鈴木大拙，娑婆と極楽，1968, p. 33)

日本の靈性の特徴：何ものをも持たないで，その身そのまま相手の懷の中に飛び込むというのが，日本精神の明るいところである…靈性は実にこの明るきものを，もっとも根源的にはたらかしたところに現れ出る。(鈴木大拙，日本の靈性，1968, p. 29)

臨済録：如法の見解を得たければ，ともかく人の惑わしを受けぬことだ。自己の内においても外においても。出逢えばすぐに殺せ。(臨済義玄，小川隆訳，2020, p. 32)

禅宗と浄土真宗：「他の書物が一切なくなると仮定しても臨済録と歎異抄さえあればよい」(西谷，1987, p. 45)

西田哲学と「対話」モデルの主要概念

直感と反省：「直観というのは，主客の未だ分れない，知るものと知られるものとの一つである。現実そのままな，不断進行の意識である。反省というのは，この進行の外に立って，翻ってこれを見た意識である。」(西田幾多郎，1978, p15)

純粹経験：純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時，未だ主もなく客もない，知識と其対象とが全く同一して居る。(西田幾多郎，善の研究，1968, p. 9)

純粹経験の上田閑照による解説：「西田幾多郎の主著『善の研究』の第一編は反省以前から始まり，第二編は反省から始まり，反省が遂行される。反省以前が心の現象になるのは，反省によってではなく，反省が破られるという方法においてであり，第一編の冒頭で突然直接に純粹経験が提示されるという手法はそれにふさわしいと言える。しかしまた，反省を破るという手法で反省に与えられるものこそ，反省を真に反省せしめるのである。」(上田閑照，1998, p. 180)

自覚：自己の中に自己を写す（その時の自分と自分の環境を写しとり記述する）ということとは，一旦写してそれで終りということではなく，写すことがプラスアルファになっていくということが無限に続けられていく。それが自己写像としての自覚の構造です(上田閑照，1991, p. 286)。

「対話」：「たとえば「自分を出しすぎる」，あるいは反対に「自分をもっていない」といわれる。前者では自分は捨てるべきものとされ，後者では自分をもつべきもの，自分として確立さるべきものとされている。この言葉づかいに自分というものの本当の姿が映されている。すなわち「自己からの自由」と「自己への自由」が，区別できないほど近くにある状態が真の自己なのである。「自分から出て自分に帰る」がこのように無を通る体験なので，それが観念的空回りか，あるいは自己の生な自由運動かは，具体的に自己でない他者を通して

いるかどうかによる。その限りそれぞれが真に自己であり得るのが「人間と人間」としての人間存在であり、それが「と」の構造であり、それが「対話」として遂行されるのである。」(上田閑照, 1993, p. 189-190)

3-2. 心理療法の基本技術

筆者の西川は、上記の概念に依り心理療法の基本技術を構成し、大学院附属相談室での7人目の担当者の共著者の森川に示した(表1参照)。1. 坐禅の準備を、対話の準備とする。心身の一致、生理心理を認知する。2. 面接途中で一旦止めて窓を開けて換気する。2-1. 環境を調える。2-2. 環境に於いて一人になる。3. 相互作用主観性の立場を取り鏡映を重視する(Bohleber, W., 2013, p 814)の三点である。

表 1. 心理療法の基本技術

セラピストは、「今、ここで」クライアントの全身が発する声を、全身で聴く。全身で向き合おうとし、相談する。
技術；相互作用主観性視点での鏡映；「あなたは私であり、私はあなたである」
準備； 調身；背骨の上に頭をまっすぐ載せる
調息；細く長くゆっくり、途中止まりながら、呼吸をする。続ける。
調心；「今、ここで」の呼吸法を感じ味わう。想念が生じたら、それを追わず無視する。 ⁵⁾
介入；安全な環境を整えて提供する；自分自身の体温、体重、室温らの五感を、呼吸法で覚醒させ、その自分で、クライアントを掌の上に載せて体重を感じ、体温と分布(首上が熱く、腰下が冷えている等)をモニターする。

4. データの呈示

本節では、事例の概要、クライアントの力動的定式化、つまり心理学的問題理解、方針、各回の逐語と後のスーパービジョンでのコメントを示す。

4-1. 事例概要

筆者の西川は、大学院附属心理相談室で、本事例の査定面接とスーパービジョンを担当した。査定面接での心理診断は、多重心的外傷だった。院生が1年の期限、約25回を6人の女性が担当した。内容的に区別して、4年目までの表現体験の積み重ねに焦点が当てられ、投射機制が多用されていた時期を第1期とする。5,6年目は、同性同輩の軽い話しあい体験の積み重ねに焦点を当て、原始的防衛機制は弱まり、高度の防衛機制が多用されるようになった。これを第2期とする。本研究は内的課題に焦点を当てた。第3期とする。現在、精神科デイケアでは服薬なしの生活を再保証されている。尚クライアントから承諾を受けデータ

5) 横田南嶺(2021)

を利用させていただいた。個人性を守るため一部を改めている。

[クライアント]: A (30代前半, 女性) [主訴]: 「引きこもる前にはなかった症状 (人を罵りそうになる等) で困っている。今は働けないが働けるようになりたい」 [面接構造]: 隔週, 日時一定 [来談経緯]: 自らインターネット検索し, 主治医に紹介を希望 [家族構成]: 父親; 会社役員。母親; 主婦。三人同胞, 家に残る次姉とクライアントの四大家族

4-2. 第3期の力動的定式化

クライアントの母親の「社会的に自立しなさい。ただし, 家の中では私はこれまで通りの相互依存関係を続けます。あなた一人でやりなさい」は, 「社会的な自立はしなさい。私から自立はしてはいけません」で, この圧縮の中身はダブルバインド (double bind) (Bateson, G., 1986, p. 295-329; Ciponpi, L., 1994/1996 p. 34) を含んでいる。母親は, 異なる水準の自立概念を, 同音異義語の「ジリツ」と発声しつつづけている。「見せかけだけの愛」 (Ciponpi, L., 1994/1996, p. 34) を, 素直に理解しようとして認知的に混乱するクライアントを, 母親は, 罵倒する。このような経過があり, 相互依存課題の未解決も重なって, クライアントは心的混乱が, 生じやすい。母親からの, 「「ジリツ」できないのは無能だからだ」との価値下げに, 順応を強いられたクライアントは, 価値下げ機制と表裏な理想化機制を発動させ, 母親からの脱同一視が一層, 難しくなる悪循環から抜け出せていない。「私 (娘) - 家族 - 社会」の三者関係世界に, 「私 (母) - 娘」の二者関係世界に留まる母が, 言及を行うというやりとりの空間は歪む。これがダブルバインドの実相であり, 「調身, 調息, 調心」による換気が必要であると考えられる。

4-3. 心理療法の方針

クライアントの身体症状である息苦しさが換気される場所を貸与し, 対話で, クライアントの自己理解を手助けする。そのために 1) 面接中に部屋の換気を行い, 一人になる時間を作る。2) 誠実な態度で対話を心がけるセラピストを相手に, クライアントは課題を検討し, セラピストもまた課題を検討する。

4-4. 第3期#1~#8のセッションの過程概要 (以下, クライアントはCI, セラピストは, Thと記す。右段落はThの内言)

【#1】(挨拶) **C11.** 母が欠点だらけなのに, 完璧な人のように思えてしまう。引きこもりの時, 母に「両親がいないと生きていけないでしょ」と言われた。バイトをし始めた時, 玄関で気持ちを切り替えて出かけたのに, 母は見送りに来て, 見張られているようだった。一人暮らしできるほどのバイト代ではなかった。母がいなかったら, 飢え死かって感じていた。そのせいで, 母は命の恩人にみえる。だから完璧なような気がしてしまう, そう思っていると自立できない気もして, どうしたらいいのか? **[T1]** Th1. 玄関では,

【CI: 全身が底冷えしている Th: 全身冷たい。意識して深呼吸を繰り返す】

C11. 話し出す前に手足を動かし唾を飲む音が聞こえたり, 組んだ指先が震えたり

気持ちをどう切り替えていた？ CI2. 家の中でボーつとした状態から、外で気を張っている状態に。Th2. それがいづらくなる？ CI3. はい。母は、私を詰って楽しんでいるみたいでした。Th3. それは辛くなりそう。CI4. はい【沈黙 4 分半】父も私を見捨てそうだったし。Th4. 私は今、どうやって生き延びてきたのか、と思っていた。CI5. ひたすら耐えるだけだった。Th5. 耐えるのは、どんな感じ？ 【沈黙 2 分】CI6. 外に出た時は、別の事を考えていた。Th6. 家の中では？ CI7. なじられて腹を立てていたけど、今思うと恐怖感で押し潰されていた。Th7. なるほど。家族の中に誰も味方がいない感じ、怖いことだと想像しています。【沈黙 3 分】CI8. 私高校 1 年の時、毎日のように遅刻して。体が怠いのと、恐怖感があった、(ラジオ番組からのプレゼントが御守りだった話し)。Th8. 学校への恐怖感とは？ CI9. 学校への恐怖感ではなくて、外に出て自分が失敗するんじゃないかという恐怖感。御守りは、失敗してもラジオを聞いていれば忘れられるから大丈夫という安心感【T1】Th9. なる換気していいですか、5 分位一人になる時間を。【5 分換気】CI10. 私は、小さい時から味方が殆どいなかったなと思って、それで、地に足が着いてない感じがして、それが症状にも出ているって気がします。Th10. 不安？ CI11. はい【沈黙 1 分】Th11. 足場が安定した感じとは？ CI14. 安心していて、突き落そうとして来る人がいないような感じ。Th15. それはドキドキしますね。【沈黙 1 分】もう少しで時間です。【沈黙 2 分】CI15. 引きこもりの時に、綱から完全に落ちているような気持ちで、その後、家を出て生活保護を受ければいいやって思っても、その気持ちから回復できない。どうしたらいいか？ Th16. 長く綱から落ちていたなら、そっちに慣れた感覚があると思う。すぐに安定した場所に行くのは難しいかな。一方で、A さんには少しずつは、もどかしいかな？ CI16. もどかしい感じはします。私は、引きこもるのを止めて、日雇いの派遣会社に登録したんです。母は、「日雇いの仕事なんか」と怒った。母は私が 5% とか 10% の努力をしても気に入らないと思うので、そういうことも、自分の 100 か 0 かの性格と関係ある？ Th17. お母さんに影響された？ CI17. はい Th18. 考える時に時々体が震えるように見えた。辛いかなと考えたんですけど？ CI18. それは大丈夫 Th19. 感想は？ CI19. 昔から味方が居ないっていう状態だったけど、ここにも、デイケアにも行けていて、昔よりは気分状態は良くなったのかなと。【C2】Th20. 良かった。

スーパーバイザーのコメント（以下、SVer と記す）；二人は内的作業に入っているのではないか。

と緊張している様子。Th は安心できない感覚を想像して、恐ろしくなった。

Th4. やるせない感じ、言葉がまとまらない。CI. も、こういう感覚かもしれない。

Th7；初めに聞いた話が強烈で、その話から離れられなくなってしまっていることを素直に伝えた。

CI9. 【T1】；味方があったことがあるのだなと、安心。

【C15】辛くないかと聞きたい気持ちがあり、考える時間が長いことに、しんどくなっていた。

【# 3】(挨拶) Cl1. 私は自分を、働けもしなくて... 社会のお荷物みたいに感じていて、それは、つい思うのではなくて、私がそう思いたい自分がある気がして。私は、(小学生の頃、家庭であまり手がかけられず、学校で苛めを受ける日々だったと話す)、将来の夢はよく変わったのですが、仕事で優秀な人間になって、周りを見下したいんじゃないかと思って。以前、私がゼロをプラスにする目標を持ってない、って言ったんですけど、人を見下すことでしか、精神のバランスを取れないことが、自分がお荷物だと思ってしまう原因だと思って。人を見下さなくてもバランスを取れるようにするためには、どうしたらいいのか？ 【C1】 Th2. バランスが取れないって、どんな状態ですか？ Cl. 劣等感で一杯の状態です。Th3. どんな劣等感？ Cl3. 人から褒められることが何にもない、です。Th4. 優秀な大学とか会社に行ったら褒められるとか。そういうバランスのとり方？ Cl4 はい。【沈黙 4 分】人はどんなものを持っていても、もっと欲しいって思い続けていたら、満足できないので、今持っているもので、満足する必要があるかなって。中々それは難しいなって。【C2】 Th5. 満足しない感じ？ Cl5. 私が、これができない、あれができないばかり見てしまうっていうこと、家族とも仲が良くない、友達がいないって。Th6. 戻っても良いですか？ Cl6. はい。Th7. 私は、人を見下して、劣等感のバランスを取る方法でうまく行かないことが起こっていたって想像していました。【T1】 【換気 5 分】 Cl7. 人を見下す方法は、上手く行ったわけではないです。最近気づいたのは、上手く行かなくなったからじゃなくて、選択権が出てきたからだと思う。昔は見下す以外になかったけど、今はそうでなくなってきたし(高校以来の知人を、話すと自分を蹴落とすことばかり言うので、友達と思われていなと思い、去年アドレス帳から削除した)今は判断できるようになりました。Th8. なるほど。でも、その選択肢は、どうですかね？ Cl8. 自分を認めるっていうことができるようになりかけているので、あるもので満足しようって思います。それが完全にはできていないから、まだ人を見下すことから抜け出せていないと思います。マイナスをゼロにではなくてゼロをプラスにと考えるには、この考え方から抜け出さないと。【沈黙 3 分】 Th8. 今の精神のバランス

【Cl 全身常温。肩先、膝から下が力ない Th 全身常温】

Th7；【T1】違ったら、違うと言って下さるので、自分の思ったことを伝えても大丈夫と思う。

Cl7；選択権があることに気付いたけど、選択肢は思いついている？ まだないんじゃないかな。

はどうですか？ [T2] Cl9. 昔よりはだいぶ良くなっています。できることも増えて、自分を昔より信用するようになったのもあります。あと、ここに通ったり、攻撃してこない人が一杯いるなって知ったことだと思います。中学の時に好きなラジオ DJ がいて、高校に入って多少好きになれる人がいた。好きな人がいれば見下すことも少し減るかと思います [C3]。Th9. なるほど。Cl10. 人を好きになれるようになってきて、前より大分よくなっていると思うけど、家で母が下の次姉を詰っているのが聞こえたり、友達がいなかったり、好きな人がいないっていう状況もあるかな。そういう状況だと感謝とか尊敬とかプラスの感情だけで生活するのは難しい。どうしたらいいか考えたい。

SVer；自分の生々しさに触れつつ話す、そのテンポを大事にしましょう。

【# 5】(挨拶) Cl1. 最近、よく具合が悪くて、人と余り話してなくて、気分が悪くなって、人と喋りたいと思って一昨日、知人に電話をして、1時間位話し込んで「声を聞けて嬉しかったです」って言って貰えたんですけど、多分本当だろうって思うけど、なかなか腑に落ちない。(別の人との同じ体験を話す) 昔、Th の先生に「外では戦う姿勢ではなく、気を緩めたら A さんを守ってあげたいって思うのは私だけじゃないはず」って言われたことを、前 B 先生にお話したら「気を張っていてもきっと、あなたのことを気にかけてくれる人はいるんじゃないか」って言われたのを思い出したけど、なかなか腑に落ちない。(中学時代に、学校で苛められているのを知った母親が、自力で解決させようとした。でも、自分を罵るようになった) 【沈黙 5 分】(深いため息の後)(罵り始めた) 母は、想像していた以上に酷い母親だと思って。小学生の時に苛められていたのは、そのグループにいた時は友達だと思われているってその頃、思っていたんですが、当時も友達だとは思われていなかったって思うんです。だけど、小さい時から同級生とか、母と長姉に苛められるみたいのが普通だったので、そういうことに気付くことができない状態だったかな。…母がすごく酷い母親だっていうことが凄く納得できたのは最近です。Th1. 最近納得するまでは、酷いというのが、完全には納得できなかった。Cl2. はい Th2. 最初の話しに戻ってもいいですか。Cl3. はい。Th3. 信用すると傷つくイメージは？ Cl4. 本当は他の人といった方が楽しいんじゃないかとか、信用しても…裏切られると言うか、別に私じゃなくてもいいのかなって言うのが Th4.A さんじゃなくてもいいんじゃないってことに傷つく Cl5 はい。Th5. なるほど。【5 分換気】 Cl6. 私は、昔から必要とされて

【Cl：全身常温。やや胴体が熱い。Th：全身常温。】

Cl1 [T1]；何となく違和感。この時は言葉にならなかったが、私は Cl の硬さを、中のものを外に出ないようにするための硬さだと感じていたが、以前の Th たちが外界から内を守るための硬さという認識で話しているように感じたからかも知れない。

Cl6；大切な話な気

ないのと、心配されてない寂しさがあるかなって。必要としてくれる人にあまり出会わなかったです。困っていても、なかなか心配して貰えなかったので【C1】。【沈黙8分】Th6. 凄く寂しい。だからこそ小学校の時に、苛めて来た子たちの所に戻らなければいいのに、戻ったりしていた。その寂しさがあったからと考えていました。Aさんが辛い気持ちを抱えている時に、でも伝わり難い部分があるから誰も心配してくれなくてっていう時は、そういうお気持ちで過ごしているのかな。C17. 周りの人に敵意を持たれている感じ。Th7. 何で、ですか？ C18. 心配するに値しない人だと思われている感じがします。Th8. 心配するに値しない人だと思われて、心配してくれないと思うと、敵意を向けられている気持ちになる？ C19. はい。Th9. 少し納得しました。Th10. 感想は？ C110. 過去に囚われて、現在が、現実味を帯びて見えてこない感じがします【C2】。SVer（セラピストは眠気を覚えたと言語）【T1】はセラピストにとって重要な体験かもしれない。

がする。母が憎いとか、周りが怖いとかじゃなくて、自分の中の寂しさ。

【#8】(挨拶)【T1】C11. 目標とビジョンがない原因が、何を達成しても母がむしり取ってしまうと感じているからかなと思って。...何をやっても母に台無しにされてしまうので、それで達成しようという気がないから、目標とかがないのかなと【T2】。Th1. Aさんは派遣で働き始めたり何かを達成した時にどんな感じでしたか？ C12. 働きだした時は、引き籠りをやめるのが怖かったです。ほとんど外出もしてなかったのに、いきなり働きだすっていうのは怖かった。Th2. なんかことをいうのか C13. ずっと閉ざされた空間にいたので、そこから外に出るのが怖かった。Th3. 何か外に怖いものがあるのではなく、外に出ること自体が怖い。C14. はい。【沈黙3分】私は今まで成果を出したことが殆どない気がして、そういうのを達成したくならないのは、母が、台無しにしてしまうからで。そのせいでますます達成できない悪循環かなって。Th8. 働き始めた時っていうのも、そんなに達成感があったっていう話題ではなかったような気がしていたので【沈黙10分半】C19. 私、中3の時から高校出るまではラジオを聴きながら勉強していたんですけど。ずーっとラジオを聞いてないで。ラジオを聞きながら勉強するのは1, 2時間にして、残りはラジオを聞かないで勉強して、テストでいい点を取ったほうが、本当に楽しい生活をできたんだろうと思うんですけど。友達が居なかったりとか、病気だったりとか、しんどいことが多くて、ラジオっていう目先の楽しみ優先する位つまらない人生だったから、達成することが出来なかったのかな。

【C1：上半身が熱い。膝下がやや冷たい。体重が右側（Th. が90度で居るほう）に傾いている。今は、自分はそこから離れて見ている。今までは、自分がそれを支えなくても倒れてしまうと思っていた【T1】。

Th：全身常温。膝下、手の指先が軽い。】

C11.：母親の話から始めるのは久しぶりに感じた。やや、怒っている印象、最近何かあったのかと想像する。

C11：「むしり取る」の中に怒りがある？

Th7. 外に出ること

【C2】 Th9. どんな感じだったら、楽しい人生でいたかね。Cl10. やる気が出るような、周りの人に恵まれているとか。そういう環境があれば良かった。【C3】 Th10. 恵まれているような環境…人？ 人ですか Cl11. 人に恵まれている環境 Th11. 人に恵まれた環境だったらよかった。目標が浮かん出たかなって感じがですかね。【沈黙 10分】 Cl12. 私は小さいとき、父になついていた。父は人の価値は能力だけだと思っているような人だと思いますし、その年齢ならできて当たり前のことを褒めるとか、幼稚な扱いをしてきたです。そういう父に、なついていたっていうのは、本当はそんな面白いと思わないとか、退屈を紛らわせていたんだなと思って。本当に価値があることをやろうと思わなかったのは、そういうことのあるのかな 【C4】。Th12. A さんが父になついていたのは、それ以外に面白いことがなかったから Cl13. はい。

の恐怖。家の中のほうが怖くないのか？
家の中は怒り？【T3】

SVer；セラピストのグループ体験は、「場所／天地に根ざして生きる」課題につながるものかもしれない。

5. 分析

本節では、心理療法をデータ化した逐語を、西田理論の「対話」モデルを用いて分析する。

5-1. 分析方法

以下の手続きで行なった。「対話」モデルの構成概念に該当する箇所を分析する。

5-2. セッションの分析（クライアント展開表現は【C】、セラピスト表現は【T】と記す）

〔 #1 〕 Cl1. で Th は、A さんは恐怖に圧倒されていると想定するが、Cl19. で修正された【T2：内省が破れる】。Cl は、Cl19 で現在の自己像を、過去のそれと比較しつつ描き直す【C1；自覚】。

〔 #3 〕 Cl1 で、A さんは「人を見下さなくても心のバランスを取れるためには、どうしたらいいのか？」と内的課題を語る【C1；内省/課題化】。Cl4 で自分の未鍛錬な領域を同定する【C2；内省】。Th6～7 で、Th は広い対話の場を感じている【T1；対話/場所】。Cl9 では、対話のなかで A さんは内的世界の探求、分析をする【C3；内省/課題の分析】。

〔 #5 〕 Cl1～6 で、A さんは思春期から今までの親子関係、同輩関係での傷つき体験をまとめて語る。そこでの切羽詰まらされた体験を力にしてきたのを止めたい。そのための折り合いとして人に普遍的な寂しさがあるのではないかと Th に語る【C1；自覚/内省】。Cl12 で、A さんは、内省が Th に破られる体験を得る【C2；内省が破られる】。本セッション以降、#7 まで Th は眠気を覚えた。

〔 #8 〕 開始時に、Th は、A の体重が Th の側に傾いていることに気づく。これまでもそうだったことにも気づく。Th は、今は、そこから離れて見ているが、ここ数回は、自分が

それを支えなくても倒れてしまうと思っていた【T1：内省が打ち破られる】。C11で、Thは、#4以来葛藤していた自分の見方を確認する【T2：内省】。Th7.で、Thは、横の広がりでのAの体験の違い、恐れと怒りを記述する【C1対話】【T3：自覚】。Thは、寄りかかる姿勢のAを支えねばならないと思い緊張し、それが眠気を引き起こしていたのかもしれないと振り返った。このセッションでThは、Aの長い時沈黙が平気になった。C1～C4でThの明確化もありC1はAは無気力になっていった体験の圧縮を解き始める記述をし、「悪循環」に気づく。C18, 9【C2自覚と内省】。C110.「やる気がでるような、環境がほしかった」と洞察する【C3：対話と内省】。AはC12で父との心理的再会という新たな主題に言及する【C4：自覚】。

6. 考察

本項では、分析結果から「対話」構成概念の臨床的有効性と、本事例の心理療法変数とを考察する。

6-1. 「対話」構成概念の臨床変数としての有効性の検証

セッション過程を本モデルから分析することで、① 自分の問題を外界と内界をつなげて捉える課題化から、外界の刺激のせいにするのではなく、自身の内的な心理的課題とする、そして葛藤の覚知などの「内省」② 以前の「内省」内容が相手の一言で否定され、真の内省に向かう「内省が打ち破られる」体験、③ 自分自身の過去と現在を比較した記述である「自覚」、④ 上記を並行して行う二人の「対話」が生じている。また展開に伴って「対話の場所」への言及から「今、ここで」のセラピスト個人の「場所」の閉塞感と眠気、そしてそこからの開放体験も捉えられている。以上から、本モデルが心理療法過程の展開点を同定する手法としての有効性が傍証されたとと言える。

6-2. 本事例の心理療法変数の同定

#4から#7までの間、セラピストは、眠気に襲われる逆抵抗を呈し、強い不安が潜在していた。#7の後にセラピストは訓練文脈の集中的なグループ体験で、他のメンバーと共にある小集団を、自分が外界を構築する上での基地となる移行対象として知覚する体験(Scheidlinger, S., 1999, p. 98)をしたと考えられる。その後の#8で、セラピストは眠気を感じず、クライアントは父親への同一視に言及し始めた。これは、移行対象として働いたセラピストが、母子の二者空間にいたクライアントに、母子と父子の三者の小集団を支える場所を提供したためだと考えられる。

7. 結論

西田哲学の構成概念が、心理療法過程の有効な変数の機能を有することが確認され、西田哲学が、臨床理論を包含することも傍証された。また、グループ体験で得られる、自分が、

普遍的な大きな母体、に包まれているのだというセラピストの体験が、同性のクライアントとの心理療法展開上の有用な変数であることが同定された。故に、基本技術（表1）に場所/大地の覚知を付加する必要があるが見出された（表2）。

表2. 大地性を覚知する技術（横田南嶺, 2021）

準備：「両方の足でしっかり、床を踏みしめて今この大地に支えられていることを感じます。そして足に力を入れて「よし立ち上がるぞ」という気持ちで、お尻を五センチから10センチほどすーっと持ち上げていって、ストンとこう下ろします。肩の力を抜きましょう。息を吸いながら、肩を持ち上げ持ち上げていって吐くと同時にすーっとこう下ろして、もう一度息を吸いながら吸いながら肩をぎゅうーっと持ち上げていって、吐くと同時に、すーとーんと下ろします。最初一息、息を強く吐き出します。お腹の底の空気も全部はき出してしまおう気持ちで、抱えている想いや煩いも全てはき出してしまおう気持ちで口を開いて強く一息「はっ あ あ あ と吐き出して、口を閉じます、すると、鼻から新鮮な空気が一杯入って参ります。体の隅々まで新しい空気が行き渡っていくのを感じながら、「ああーありがたい嬉しいな」とこう思って、思わずほほ笑みが溢れて参ります。そのまま暫く、座りましょう。

【引用文献】

- Bohleber, W. (2013) The Concept of Intersubjectivity in Psychoanalysis: Taking Critical Stock, *Inter. J. of Psycho-Analysis*, 94(4): 799-823
- Bateson, G. (1986) Steps to an ecology of mind, Harper & Row, 1972, pp 565. (精神の生態学, 佐藤良明他訳, 思索社, pp. 391)
- Coonpi, L. (1994) Affektlogik: Ueber die Struktur der Psyche und ihre Entwicklung, Auer-System-Verlag, Carl, pp.423 (感情論理, 1996, 松本雅彦, 菅原圭悟, 井上有史 訳, 学樹書院 pp. 505)
- Daehnert, C. (1998). The False Self as a Means of Disidentification: A Psychoanalytic Case Study. *Contemp. Psychoanal.*, 34(2): 251-271
- Doi, T. (1971), *The Anatomy of Dependence*, trans. J. Bester, Kodansha International, Tokyo/San Francisco, 1973.
- Freud, A. (1962) Assessment of Childhood Disturbances, *Psychoanalytic Study of the Child*, 17: 149-158
- Freud, S. (1936) Letter from Sigmund Freud to Ludwig Binswanger October 8, 1936. *Letters of Sigmund Freud 1873-1939*, 431
- Howell, E. (2005). *The Dissociative Mind*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press. pp. 307
- 松居桃楼 (1966) 死に勝つまでの三十日一天台智顗天台小止観物語, 柏樹社, pp. 219
- Moore, B. E. & Fine, B. D. (eds.). (1990) *Psychoanalytic Terms and Concepts*. London & New Haven: Yale Univ. Press, 3rd edition, pp. 206 [HETEROSEXUALITY] の項目
- 西田幾多郎 (1978) 善の研究, 西田幾多郎全集, 第一巻, 東京, 岩波書店, pp. 457.
- 西田幾多郎 (1978) 自覚に於ける直感と自覚, 西田幾多郎全集, 第二巻, 東京, 岩波書店, pp. 396.

- 西谷啓治（1987）わが師西田幾多郎先生を語る，西谷啓治著作集，第九巻，創文社，pp.340.
- 西川昌弘（2019）心理療法家の空間と場所のひらけから「甘え」への退行や固着へ，神奈川大学心理相談センター紀要，（10），11-23
- 小川隆（2020）中国禅宗史，東京，筑摩書房，pp.376
- 櫻庭太一（2021），雑誌『精神分析』における高橋鐵の活動，専修国文（91）：p179-267
- Scheidlinger, S.（1999）On the Concepts of Amae and the Mother-Group, J. Am. Acad. Psychoanal., 27(1): 91-100
- 鈴木大拙（1968）日本の靈性，所収，鈴木大拙全集，第八巻，岩波書店，pp.444
- 鈴木大拙（1960）禅の思想，所収，鈴木大拙全集，第一巻，岩波書店，pp.521
- 鈴木大拙（1970）日本人の心，東洋的な見方 所収，鈴木大拙全集，第二十巻，岩波書店，pp.428.
- 上田閑照（1991）西田幾多郎を読む，（p.282-287），岩波セミナーブックス 38，東京，岩波書店，pp.413
- 上田閑照（1998）西田哲学への導き 経験と自覚，（p.180），同時代ライブラリー 339，東京，岩波書店，pp.281
- 上田閑照（2001）第一部 第四章 禅と哲学，（p.138-139），上田閑照集，第一巻，東京，岩波書店，pp356
- 山川宗玄（2019）禅の知恵に学ぶ，NHK 出版，pp160
- 横田南嶺（2021）管長日記 呼吸瞑想
- https://www.youtube.com/watch?v=TuzNO50vrT8&list=RDCMUCgH4fHMpKJmxmSk2s1gVQGg&start_radio=1（2021年3月1日閲覧）
- Winnicott, D. W. (1958) Anxiety associated with insecurity, (pp.99-100), In Through Paediatrics to PsychoAnalysis (1958). London: Tavistock, 1958, (pp.97-100)